

苦行に似た道楽の副作用（鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2017/8/29 6:30 | 日本経済新聞 電子版

「こんな言い方をすると叱られるけれど、交通事故の数に比べれば、心配することもないと思うよ。とにかく、お互い時間がとりにくいのだから、会って話そうよ」

テロを恐れて欧州行きを止める気は毛頭ないのだが、「交通事故に比べれば」とは、何という物言いなのかと、友人の言葉に、瞬時、返す言葉が見つからなかった。バルセロナでのテロの報道を見る。どこまでも、根が深い話である。21世紀になり、核をはじめとしたさまざまな制御が利いて、悲劇的な世界戦争こそ起きてはいないが、テロ事件が象徴的に訴えている憎しみの噴出が収まることはない。英国の移民の数がブレグジット（欧州連合＝EU＝離脱）以降、40%ほど減少したという報道があった。その分、IT分野始め、労働力の不足も報道されている。個人のレベルに広がる無差別テロの頻発は、20世紀とは異なる視点が要求されるが、識者とされる人々のコメントは、いつも時事的な反応にすぎない気がする。

IIJを設立したころ、インターネットは誰が責任を持ってコントロールをしているのかわからないアナーキーな仕組みで、通信としては問題であると、そんな批判を受けていたのだが、いまや、インターネットという技術を利用した究極の監視体制の構築が進んでいる。「究極の分散は、究極の集中につながる」といった言葉を、改めて受け入れるような状況である。多くの国々では、安全の確保という面から、そんな流れを支持する市民が多くなっている。ボストンマラソンのテロに始まって、記憶に収まりきれないほど、数多くの無差別テロが実行され、多くの市民が「偶然、その場にいただけの悲劇」に見舞われる。情報の流れをフラット化することで、あらゆる仕組みを変えようといった思いをもっていたのが、インターネット初期の世代である。ところが、そんな原点が、逆転現象を起こして、その流れがグローバル方向となっている。日々なんらかのインシデントが生じているインターネットの世界では、なによりも「安全・安心」が要求され、そのために、セキュリティ分野の開発を進め続けているわけなのだが、それは究極の監視社会につながる技術開発にもなるわけで、ある種の居心地の悪さを、どこかで感じ続けている。あくまで私の個人的な思いである。

■心身ともに疲れ切った3日間

「病膏肓（こうこう）に入る」という古い言葉がある。膏（こう）は心臓の下、肓（こう）は横隔膜の上をいう。ことわざの由来は、中国の晋の景侯が重い病にかかったときに、秦から名医を招いたのだが、病が膏と肓にあり、針灸（しんきゅう）では手がつけれなかったというのがいわれだとされている。いまどき、この古いことわざは、道楽に熱中して手がつけれないときに使われることが多い。「あいつの道楽にゃ、手のつけようがねえや、どうしようもねえ」、落語の語り口でいえば、そんな風になる。

「いまさらだけど、鈴木さんは、病膏肓に入るといった道楽が多過ぎる。酒や煙草（たばこ）はとにかく、仕事、音楽、本……。いい年なのに、少しはセーブした方がいいと思うけど、止められないからこそ道楽なのだろうなあ」。ベルリンのホテルで友人と朝食をとっていたら、そんな言葉で揶揄される。仕事まで、道楽とくくられるのは腑（ふ）に落ちないのだが、そう見えるのかもしれない。

アジアから戻って次の週末から欧州である。ザルツブルク、ベルリン、パイロイトー。音楽ファンなら羨ましがれる日程なのだが、私の場合、今年の春、13回目を終えた「東京・春・音楽祭」のためである。音楽ビジネスなどまったく無知で、音楽関係者も知らなかったのだが、素人だけに恐れも知らず、高名な演奏家やクラシック音楽では、世界的に知られた方々と、直接、交流を始めてしまったのである。春の音楽祭が開催されている期間と夏の終わりの10日間ほどは、寝る間もない日が続く。寝ることを忘れさえすれば、ネットと時差の残酷なお恵みで、欧州の音楽祭をうろつきながら、仕事もなんとかこなせるのである。



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催する。近著に「日本インターネット書紀」がある。



ザルツブルクの風景（筆者撮影）



「アイダ」のカーテンコール（筆者撮影）

今年のザルツブルクは、リッカルド・ムーティさんの心に染み入るような「アイダ」の他は、20世紀という凶暴な時代と鋭い感性で対峙したようなオペラの上演が多く、そんなオペラに3日も続けて付き合ってしまう、心身ともに疲れ切ってしまった。音楽に関心のない方には申し訳ないのだが、3日間の演目は「ムツェンスク郡のマクベス夫人」（ショスタコヴィチ）、「リア」（ラインマン）、「ヴォツェック」（ベルク）である。

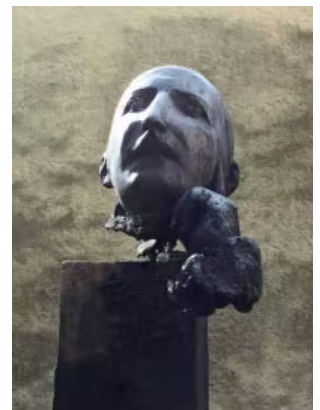
「無為、退屈、不眠」は、ツルゲーネフからドストエフスキー、チェーホフなど、19世紀ロシア文学の大きなテーマだが、「ムツェンスク郡のマクベス夫人」は、20世紀という時代のそれである。マクベス夫人とあるだけに、シェークスピアの「マクベス」が下敷きにあるはずなのだが、オペラの展開は、むしろ日本の怪談「真景累が淵」や「怪談乳房榎（えのき）」といったおどろおどろしい舞台を思い起こさせるものである。夫に構ってもらえず、時間を持て余すほどの退屈と不眠に苛（さいな）まれるマクベス夫人が、女たらしのような男に弄（もよ）ばれ、義父を毒殺し、夫を殺してシベリアの流刑囚となり、そこで一緒に流された男に裏切られたあげく、その女を道連れに自殺するという救いようのないオペラである。ヤンソンスの指揮による傑出した演奏にもかかわらず、公演後は、疲労感が噴き出して、食事も受け付けられないほどだった。欲望の虜（とりこ）となった娘に裏切られ、翻弄される老いたリア王の狂気、不幸だけが真綿のように付きまとって死に至るヴォツェック。聴衆を疲労感で押し潰すほどの表現となっているのは、私たちが忘れようとしている20世紀という時代の本質、正体が、鋭い芸術表現で裸にされるからだろうか。公演の後は、暗くなった舗道に光る明かりをぼんやりと眺めながら、煙草を吸い、アルコール度の強いグラッパを口にしながら茫然（ぼうぜん）とするばかりである。道楽も楽しみの範囲にある間は、道楽といえないのかもしれない。

ふと、ヤロスラフ・ハシュクが第1次大戦後に書いた「兵士シュヴァイクの冒険」という小説の一場面を思い出してしまった。サラエボ事件のフェルディナント大公暗殺の場面の台詞（せりふ）である。ハシュクは、その台詞を問題にされ、治安妨害のかどで監獄送りとなり、その後、知的障害の疑いで精神科病院に送られてしまう。

■デタントから始まった第1次大戦

「サラエボで、ピストルで撃たれなすつただ、旦那様。妃さまを連れて自動車でどこへお出（い）でなすつただ」「それ見な、ミユラー婆（ばあ）さん、自動車だ。あんな方々は自動車に乗れるんだ、そしてまさか自動車旅行で不幸な目にあうなんて夢にも思はなかったろうて。だが、場所が悪いや、サラエボだもの。知ってるかい、ミユラー婆さん？ サラエボってのはボスニアにあるんだよ、こりやてつきりトルコ人の仕業に違いねえ。いったい俺らこのボスニアだのヘルセゴビナだのって所を取らなきゃよかったんだ」

第1世界大戦の引き金となったサラエボ事件は、第2次バルカン戦争が収まり、利害に関わる仏口英独、当事者であるハプスブルグの緊張が緩和したという認識が広がり、大陸規模の戦争のリスクが後退していた時期に起きた。デタントが、かえって悲劇的な戦争となる。20世紀の悲劇は、人間の歴史をアリ地獄に引きずり込むような、巨大なエネルギーの暴発の始まりのような気もする。ザルツブルクから、ベルリンフィルの新しいシーズンのオープニングコンサートに向かう。第2次大戦から70年以上を経てなお、いまだに都市再開発の続くベルリンにいと、20世紀という時代について、形にならないまま、さまざまな断片が頭に浮かぶのだ。それこそ、「病膏肓（びやうかう）に入る」症状の副作用かもしれない。



第2次大戦下、アルゼンチンに亡命し、自殺したツヴァイクの像（筆者撮影）

読者からのコメント

ひの正平さん、60歳代男性

会長の言われる通り、第3次大戦が、始まりますか？

40歳代男性

「無為、退屈、不眠」。鈴木さんのブログに漂っている雰囲気にも似たものがあるように感じます。いつも気怠い読後感を得ます。嫌いではありません。日経産業新聞の「仕事師秘録」通読いたしました。なんとなくわかるような気がしました。

鈴木幸一 III会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.